

国際経済学科開設 20 周年記念座談会

日 時：平成 22 年 6 月 26 日(土)，4 時 50 分～6 時 10 分

場 所：熊本学園大学本館 第 1 会議室

参加者：

西田勝喜 (司会)

熊本学園大学経済学部教授

木曾順子

フェリス女学院大学国際交流学部教授

1991 年～2004 年熊本学園大学経済学部在職

松尾美紀 (1997 年卒)

九州国際大学経済学部助教

吉川敬介 (1998 年卒)

横浜国立大学大学院経済学研究科博士後期課程

石黒武人 (1995 年卒)

明海大学外国語学部講師

下田真也 (2001 年大学院経済学研究科修士課程修了)

久留米信愛女学院短期大学講師

宇野木広樹 (2002 年卒業)

福岡大学非常勤講師

西田：司会を担当する国際経済学科の西田です。

実は私が初代の学科長でして、それが縁で君がやるべきだというふうに言われました。

この座談会に関してはですね、はっきり申し上げて、事前にシナリオを書いて云々ということは一切しておりません。共通のテーマはない。ただしゲストの方はこちらで選別させてもらっている。研究並びに教育関係の方に今回来ていただくということです。なおこの間、記念行事の準備を進めている金先生、彼は非常に精力的にやっているので、いちおうアシスタントという形で、間に合えば、学部長の岡本先生も参加するかもしれない。

自己紹介という形でまずお互いしてもらい座談会にはいいと思います。順不同で、一番若い横国大大学院の吉川さんから。

吉川：ご紹介いただきました吉川と申します。自己紹介も兼ねてという話だったので、私は熊本学園大学附属高校からお世話になっておりまして、附属高校から大学そして修士課程までお世話になりました。熊本学園大学とはいろんな意味で縁がありまして、実は自分の父親がこちらの附属高校出身で、家族そろってこちらにずっとお世話になっていて、一倍ちょっと

愛着がある大学でもあります。横浜に行ってもなかなか向こうの大学にも最初馴染めず、非常に酷いホームシックにかかったりしていたんです。非常にうれしかったのは、木曾先生と学会が一緒でして、木曾先生の顔をみた時ものすごくほっとしました。



松尾：私は松尾と言います、よろしくお願

いします。私は大学から熊本学園大学で、国際経済学科だったんです。木曾先生は存じ上げていたんですけど授業をとった記憶があるか、ないかちょっと。マスデン先生の授業は、私、取っていて、当時これからインターネットが流行るんだと話をされたのを覚えています。私は大学院から九大の方に行きまして、そちらでマクロ経済学の勉強をやっていました。まだ博士号を持ってなくていま審査中というか審査過程にあるところです。ただ、まあ坂上先生とかに縁がありまして、その間京都大学の経済研究所に3年間研究というか非常勤研究員をさせていただきました。去年の4月からですね、九州国際大学に着任して、いままだ授業の準備と学生の対応とかそういったことでまだまだ奮闘しているところです。よろしくお願

いします。下田：久留米信愛女学院短期大学の講師をしております下田と申します。もともと経済とは何の関わりあいもありませんで、学部は九州大学の文学部でフランス文学を専攻しておりました。その後就職いたしまして、現在民間化しておりますが、九州郵政局という熊本城の近くに務めていたときに、こちらの岡本先生にお誘いをいただいて大学院の修士課程に社会人入学ということで99年にですかね、吉川さんと同期で99年に入学しました。社会人だったせいにしたいんですが、半年ほど遅れて修了いたしました。で、同じようにドクター進学を考えておりましたらこちらの慶田先生にご指導いただいていたので、当時九州大学にいらっ

しゃいました細江先生のゼミの所属になりました。その後なんとか博士号もお情けでいただきまして、九大の助教を1年勤めたあと現在の現職に就き、2年目になっております。大変光栄なことに、こちらで非常勤を1コマいただいております。恩返しができるというか、分不相応なお給料いただいております。恩返しになっていないような気がしますが、こういった形で母校にかかわっていけるということは、大変光栄なことだと毎日頃考えております。どうぞよろしくお願

いします。宇野木：福岡大学非常勤講師の宇野木と申します。私は吉川さんと同じように、学園大の付属



高校から学園大学に縁がありまして学園大学、学園大学の修士課程、そして学園大学の博士後期課程とずっと高校から博士課程までこちらの大学、熊本学園大学でお世話になっています。非常に多くの思い出があるんですけども、私はトータルで高校から博士課程卒業までがおそらく15年くらいですので、いま私が31で人生の半分をこちらで過ごさせていただいた。この間、どういったふうに校舎が変化していったのか良く

覚えています。学部のとくにちょっと何をしたいのかを見つけられなかったんですけども、博士課程の指導教授だった坂上教授からいろいろと経済学の楽しさというものを教えていただいた。今は、福岡大学の方で非常勤講師として週2コマ担当しています。

石黒：はじめまして。1995年卒の明海大学外国語学部英米語学科の専任講師をしております石黒武人と申します。こちらの大学にお世話になったのは、1995年卒ですから1991年に国際経済学科に入りまして、さまざまな面白い授業を木曾先生、西田先生いろんな方がしておられまして、その中でもとくに清野先生の国際政治学とマンガ・マンガ・ルウィン先生の開発経済論などに興味をもちました。経済学ってこんなに世の中をうまく説明できるんだ、国際政治って世界をこのようにとらえるんだとか非常に面白くなってきました。それで、開発経済に特に興味があるのでしっかり勉強しようと思って、こちらで英語が少しできるようになってからアメリカの大学に行きました。アメリカオレゴン州、オレゴン大学というところで開発について勉強したんですね。でも、アメリカの大学にいきましたら不思議なことがありますまして、開発に携わる様々なファクター間で互いにうまくコミュニケーションが取れていないということがわかりました。では、コミュニケーションを勉強しなきゃと思ひまして、日本に帰って立教大学の大学院で異文化コミュニケーション研究科というところでもう一回修士から勉強しました。修士、博士とやりまして、2008年によろやく博士号がとれてそのあと神奈川大学とか東海大学で非常勤をしまして、よろやく就職が決まったということです。非常に長い旅でよろやくということです。どうぞよろしくお願いします。

木曾：ありがとうございます。いま石黒さん、ほんとに熱心に授業を受けられていて国際労働経済論だったと思うんですが、真ん中のほうに座っていて、また留学されたこともよく覚えています。私が赴任したのは、91年なんですね。90年に一度集中講義で、赴任する前に発展途上国経済論の授業を、夏の集中講義でしました。91年の4月から2004年の3月まで13年間こちらでどっぷりつかってました。ほんとにお世話になりました。担当していた

のは今言いましたように、国際労働経済論、それから発展途上国経済論、それからゼミでは私はフィールドが南アジアで、南アジアの開発途上国事情の研究を含めて担当しておりました。まあだいたいはお話の中で申し述べます。

西田：木曾さんについてはもう少し手続き的なことで、実は私は先ほどシナリオはないといいながら入り口は設定しなければいけないなと思っています。ただ皆さん方の卒業のどの学部、どの学科の違い等を見て、とにかく僭越ながら、軌道修正とは言いませんけれど、これは国際経済学科開設 20 周年ですからとくに私は関係ないと言う方でもたまたま本学にいらっしたなら他学部で違った間接的な経験がおありでしょうから。これは能書きね。で、私が準備したもう一つ、皆さん方に今まで経歴と言った形での、経歴や略歴で聞いた御苦労をねぎらうということと、もう一つ、いわば原点に戻って、新しい学科の話をして、あたりまえのことですけど、当時で言えば新たに開設された国際経済学科の、たとえばどういう意味で、どうゆう理由で志望したのか。そういったことを含めて、いわば入り口を、なぜそうだったのかということ振り返ってもらいたい。そして他大学、学部、学科ではやったものがないというカリキュラムだったはずという意味で中身に関する議論や、その間に研修があるとありますけどでそうしたことを経験しながら、そのあと一般的には就職です。けれども、たまたま本日のこのケースでいくと進学で、これをどうするかという形の模索というか、そのためにいろんな準備がいるわけです。それを仮に出口論というふうにいえば、三つほどのポイントがあるんじゃないかというふうに私は思ったわけです。そうした形で学部時代を振り返ってみて意見をだしてもらえれば。ここで生きてきた(人生の)半分以上をね、ここで過ごしたという人がいても、中身はどうだったかということね、こちらの提案なんだけれどもいかがでしょうか。



吉川：そうですね、こちらの国際経済学科へまずそもそも、なぜ志望したかと言うと、進学というものを考えたときに、学園大というものがやっぱりこの熊本においては非常に知名度もよかったですし、自分の親せき一同も学園大よかったねと言ってくれるくらい評判がいいものですから、自分はそのままいちおう学園大に行きたいと。国際経済学科というものに関しては、やはり募集枠は商学部や経済学科にくらべたらそんなに多くはないはずなんです。で、通るかな、通らないかなということで若干その枠の賭けもあって頑張って応募したらとっ

ていただいた。国際経済学科というのは入ってみてカリキュラムに関しても経済学科に比べたら非常に外国語であったり、あとは先ほど木曾先生が教えていらっしやった、発展途上国経済論とか、あとはまあ自分のゼミの先生であったマング・マング・ルウィン先生の開発経済論といった僕らが一般的に経済学と理解しているようなもの以外にですね、非常に広い国際的な学問が学べる環境が多かった。自分は覚えているのはやはりそのいろんなものを受けたい、僕の場合は普通にセンター試験など受けていなので、非常に気持ちに余裕があったんですね。もう勉強したい、したいという気持ちになっていたというのもあったので、いろんな授業を受けて行くなかで、どんどん興味が広がっていった。その自由度と選択肢の非常にいいバランスが自分のなかでとれたのかな。大学3年ぐらいの時に自分の恩師のルウィン先生から大学院の推薦入試を進められて、それから勉強というもの、自分がどうゆうふうなものを考えながら勉強していくのか銚先を示していただいた。それと関連して違う話になるんですが、自分が在籍している横浜国立大学に行って特に痛感したのは、この学園大学の学科というのは非常に先生と学生の距離がものすごく近い。おそらく九州大学など国立大学は先生と学生の距離が非常にひらいていて、こちらから何かを聞きに行くだったり、要望をだすというのは非常に手間もかかるし、時間もかかってしまって、学園大の学部、修士含めた時の距離の近さっていうのが、凄くありがたかった。そういうことで特にその国際経済学科に行ったことで、いろいろ今後の方向性というものを指示してもらったのかなというふうに思っています。こんなもんですか。

松尾：非常に難しい質問なんですけど。国際経済学科を志望したのは、単純に試験科目でした。試験配分が英語の点数が社会と国語に比べて高かったというのがもう国際経済学科を選んだ理由です。で、漠然とほんと何も考えずにこちらの大学に来てしまったんで、当初の目的すらなかったんですけども。幸いなことに大学に入ってすぐ、岡



本先生の経済学の授業を受けたのがひとつのきっかけで、そこでシンクタンクという言葉を知り、シンクタンクに行くためにはもっと勉強しないといけないということが一つのきっかけで大学院に行こうと思ったんです。また、サークルに入っていたんですけども、顧問の先生が坂上先生で、その話をしたら、数学が勉強に必要だということで、大学1年生のときから数学のゼミを毎週1回されていて、そこでとにかくひたすら数学を毎回怒られながらやっ

たという4年間でした。結局数学ばかりやっていたので、経済学、受験に必要な経済学っていうのはまだ国際経済学科が開設されたばかりということで、ミクロ経済学、マクロ経済学が必修ではなかったんです。ですから、それはそれで勉強しなきゃならなかったんですけども、九大の英語の試験がものすごい量ありまして、岡本先生に手伝ってもらいながら、とにかく、吉川さんがおっしゃったように先生自ら指導してくださった、というそのおかげで私があるんだなと思っています。カリキュラムに関してはあんまり覚えてないんです。とにかく数学と英語は勉強したっていう思い出です。

下田：はい、私の場合はマスターの2年間だけお世話になってますので、そこにしぼったお話になりますが、当時社会人やっけていまして、特段この世界に進むってことは決めてなかったですね。いまでこそ各大学、大学院、社会人にたいする体制は整ってますが、今から十何年前の段階で、きちんと社会人をむかえいれようと施策とってらっしゃったというのは先見の明があったと思っております。で、自分が教員になって思うんですが、夜間ですとか土曜日に講義、ゼミをされるというのは大変なご苦労だと思うんです。それをきちんとやっていたいたというのが、非常にありがたかったと考えております。そういった各先生方のフォローをいただいたおかげで、私もこちらの世界に進もうと決心がついたという面はあります。実際、学部の際は全く経済学をやっておりませんでしたので、経済学の考え方や論文の読み方、書き方にいたるまで、ほんとうに大学で、この学園大学で、基礎を培ったというふうには考えております。簡単ではありますけど、ここが私の本当に研究生活の原点であり、一番のベースとつねづね思っておりますので、ここだけ強調しておきたいと思います。

宇野木：私は経済学部に入った経緯としては、経済学部って何をするとところか最初全然わからなかったんです。とりあえず、大学に進むときに経済学部に入ったらどういうところに就職できますかと聞きましたら、いろんなところに就職できます、まあつづしがききます。と言われたので、私は将来どういうふうな職業になりたいとその時点で決めてませんでしたので、経済学部に行こうと、すごく単純な理由で進学しました。だから、大学に行って何をしたらいいかわからなかったんですね。ただ、坂上先生の講義のときに、経済学っていうのはいろんなことを分析することができるんだよ、ということをお教えていただいて、経済学っていうのは人々の自由と尊厳を守る学問であり人々の幸福を考える学問なんだというふうな言葉に、すごく感銘を受けたんですね。なるほどと、経済学を勉強したいなと思えたんですね。経済学を勉強しようということで、図書館とかにいっていろいろ理論系の経済学の本にチャレンジする一方で、一般的なミクロ、マクロの教科書で、市場はこうなりますよということはわかったんですけども、それが人々の幸福にどうつながるか、そこが実はピンとこなかった

たんですよ。まあそれが経済学部のことだった。勉強不足だったんだろうな、と思っています。修士課程に行くときに、ルウィン先生の講義をとらせていただくことになって、開発経済学で、ほんとにダイレクトにみんなの幸福というのを考える、という講義を受けさせていただいて、その時に、なるほどこれなんだなと、その時に思えたんですよ。自分の一番根底にあるのは経済学で人々の幸せを考えるんだと。

石黒：まず入り口のお話なんですけど、私もとくに深く考えてなくて、商学部、経済学科と国際経済学科と、(入学試験を)全部受けたんです。それでそんなときに一番流行していた言葉が、国際だったと思います。そして、大学に入ってみましたら、内容の話ですけども、一言で言うと、カリキュラムが面白かったんですね。理論的な授業、ミクロ経済



学、マクロ経済学というのは、抽象的なものを考える、思考力を養えることができて、一方でルウィン先生の授業もそうでしたが、意外に抽象的な理論と実践が両方学べるような、カリキュラムで、おもしろくかつ、思考力をもっとこう広げていくうえで、哲学とかですね、一般教養の授業が非常に役に立った。アリストテレスの話ですとかね。そういったものを聞きながら、経済学と結びつけながら柔軟な思想を得られるような、一人ワクワクしていたようなことをおぼえています。あともうひとつ素晴らしかったのは、外国語研修センターがあったおかげで、もちろんこのカリキュラム事体が国際というものを意識していたので、世界を知りたいという気持ちにさせてくれた。カリキュラムとして非常に効果的と申しますが、学ぶものが意欲さえあれば、ほんとにどんどん学んでいけるような、内容になっているんだなというように、記憶しています。出口ですかね、こちらの先生方はほんとに協力的で実は私、アメリカの大学に行きたいと思って推薦状を書いてもらいながらも行けなかったのですが、お願いしたらですね、ほんとに皆さん快く、応援してくださいまして、先生と距離が近いという話がありましたが、そういうのは感じました。

西田：ありがとうございます。特別ゲストの木曾先生に関しましては、ちょっといままでの発言の資格はないとは申し上げませんが、別な形で、こう一つご意見とか、そういえば、皆さん方のね全員の在学中に、いい意味での試行錯誤的なものやあって、必ずしも国際経済学科が提供するカリキュラムすべてとは言わないけれども、そこに理論と実践とか、相対関係とか、われわれにとってはびっくりですよ。いやいやそこまで考えてね。話せば時間がか

かるけど、いくつかの柱があるわけですよ。文部省のお仕着せなんですよ。それからわれわれは、岡本先生、永井先生も、そこらいかにはみだすか、はみ出さない特徴がでないんだというわれわれのポリシーだったんですね。それが国経経済とか国際化とか、ひとつのキーワードだったと。若い方はね、今どきなんだそんなこと、われわれは今から国際的にいろんな難しい文化を超えて交流を深めて行くんだから、それを総括的に異文化理解という、そのためには学生をビックリさせなきゃいかん、ショックをうけさせんとね。日本人のアイデンティティといいますけど、それは自覚的な一つの研究だろう。ということでもう一つは、同じく専門科目に外国人を専任に採用する、彼らに現場に入ってもらって、基本的に言葉が通じないとバイリンガルでぶつかりあいながらこの現場で切磋琢磨していく。もはやどこもやっていることとはいえ、約10年、一回り他に先んじていました。

吉川：国際経済だとかそういう言葉、たとえば僕の大学院の専攻だって、グローバリゼーション研究科、専攻というかありまして、やっていることはようするにそれまでと何も変わらない、普通の経済やって国際やっていて、それは、僕がいたころを考えてみると、こちらの経済学科の学生さんの持っている、たとえば途上国の知識だったり、あとは国際経済の知識だったりして、やっぱり国際経済学科の人たちとは違うんですね。かといって(国際経済学科の人たちは)英米学科のように英語をしっかりとやっているわけでもなく、その分経済の知識を持っている。中にいた人間としては、自分の学科へのアイデンティティはしっかり認識はできていたかなと。僕は非常にアイデンティティがしっかりしている学科だなと思います。

吉川：僕が現在いる大学の専攻は、国際開発専攻、グローバル経済専攻、国際関係論専攻と、3つあるんですが、アイデンティティがほとんどないんですよ。名前だけ付けた感じで、やっていることが専攻ごとにかぶっていたりですね。そういった意味では、僕がいたころの国際経済学科というのは、しっかり位置づけはあったのかな。決してよいしょではありませんよ。



松尾：吉川さんのおっしゃったように、確かにあの当時まだ外国語学部はなかったんですけど、経済学部はやっぱり違うなと思ってましたね。世界は日本だけじゃないので、海外との取引の決まりごととかも勉強できたし、そうですね、やっぱり世界に目を向けた授業が多かったような気がします。かつ、経済学科との大きな区別、特徴とまではないんですけど、外国語はしっかりされていたような気がするんですね。外書購読のゼミがまた別にあたりまし

たよね。

西田：あったでしょう、重要なコア科目、海外研修と連動させての科目だったから。

松尾：私は外国語マインドが高かったが、経済学科では選択だったんですね。第一外国語の人はとりたい人はとる、第二外国語は必修ではなかったらしいんですが、私達は必修だったし、それはそれでよかったかな。中国語の勉強として中国の文化とかも自分のなかでなラったというのはあったんで、そのアイデンティティがどうだったというのは難しいんですけども、やっぱり国際経済学科でよかったと思えます。統括的っておっしゃってましたけどそんな感じだったと思います。

下田：私は学部の方ではお世話になっていないので、外部の目として言わせていただければ、必要とされているからこそ、20年間続いているわけでして、実際、前職公務員をしていたのでわかりますが、中に芯が通ってなくて、自信がないと看板を掛け替えたくなるんですね。

部の名前を変えとか、科の名前を変えとか、やりたくなるんですが、国際経済学科できちんと



20年実績を積み上げてきているってことはその中に芯が一本通っていて、内部からも外部からも適切な高い評価を貰っているんじゃないかと、けっしてよいしょではありませんので。やはり必要とされるものは残るんだな、たとえ陳腐化したような気がしてもです。こう言った形で残っていくんじゃないかな、というのが外からの視点です。

宇野木：はい、私は経済学科だったんですが、経済学科、国際経済学科と共通の授業もいくつかあったんですね。国際経済学科は発展途上国の問題だとか、そういうふうなこととかにすごく積極的に取り組んでいるような印象を受けますし、なんかすごくカラーがあるなと思えます。あとやはり自分の同僚の国際経済の人たちと話をしてもやっぱりなんか自分の問題意識はそれぞれちゃんともっているなという気がします。多様な価値観を育てると言う風な、国際経済学科のそういうふうなコンセプトが根底にあって、それを学生達が実践してきたからこそなのかなと、今になると思えます。

石黒：そうですね、国際経済学科であることを意識、強く意識したのはまず、周りにいる国際経済学科の人たちが、韓国人とか中国人の留学生とか、アメリカからきている留学生と関わっている人が多かった。学生の中で国際的な感覚が養われているような気がしました。たまたま私がそのような人たちと一緒にいたのかもしれないが、で、もう一つはですね、先生で

すね。やはり先ほどからおっしゃったように、マスデン先生やルウィン先生がいらっしたり、国際的な視野で物をみていらっしやる人が多くて、影響をうけてしまうとか、すごく感化されたことがあります。あと面白いのは、経済学の授業で経済史とかがあったんですけども、国際って横軸だけじゃなくて縦軸も結構あってイギリスの経済史なんかやると見方が違ってきて、ああいう授業もあったんだ。そういう授業をうけている自分があって、経済学科がどうだとははっきり分からないんですけど、いちおうそこに属していた、国際経済学科にいたという認識がありましたね。すみませんうまく言えなくて。

西田：いやいや、こちらからの設問というか問題の出し方が、もはや風化したとは言わないけど、もはや一般性のない異文化理解だとか、あまりにも古典的なことを持ちだしているから。これは私の考えだけど、ギャップがあるんだと、今の大学には。あのうさっきからね、べつにご意見を封じているわけではないけれど、ちょっと時間のこともあってね、今日は木曾先生にぜひとも、先ほども申し上げたように、私はうっかり10年と思っただけど13年、なかでも学科長を経験されてきた。(先生が)いったんうちを離れられてお聞きしたら次の大学が、国際交流学部、何んとも似たような、それにしてもここでの経験として立場上外部者になるけども、当時の内部者として学科の課題みたいな、問題とか、内外の目から見て経験されてきた国際経済学科に対する、ご意見なりご助言をね、物申すとかして下さい。

木曾：いえ、とんでもない。あの非常に難しいんですけどね、今は皆さんのお話を伺っていて、素晴らしいことだなというふうに、今もほんとに抽象とそれから具体的な現実をつなぐ、あるいは平面的な見方ということそして縦、立体的で多面的な学習が可能だったとしたら、これは確かに素晴らしいことだと思いますね。私、勿論、今国際交流学部でカラーはかなり違うんですね。どちらも勿論良いところそれぞれあるわけなんですけども。やはり、今のところに移って感じるのはですね、国際交流学部ということですから社会科学関係の科目と言うのは比較的そう多くはないんですね。半々です。非常に語学を重視してますので、語学は大変バラエティもありますし厚みもあるんですけども、そのぶん社会科学的なもの、ほかの文学関係、歴史関係というのも多いですから、社会科学的なものは手薄なんです。で今思い出しても、学園大の学生さんたちっていうのは、そういう社会科学的思考方法がいるときはあまり感じなかったんですが、身につけていたというのを感じるんですね。で、それというのは、今のところだと社会科学関係がかなりいい



ろ幅広くやろうとするんですね。でもここでは分業が成り立っていて、いろいろな先生方が(さまざまな分野から)いろいろな経済学的なアプローチをされている、その中で着実に力がついているんだなというのを、今お話を伺っていて思いましたね。そうだとしたらほんと素晴らしい。私はやはり学園大にお世話になっていたこと自体、私自身にとってもほんとに13年間は人生の中でも大変貴重だったし、忘れがたい期間ですね。今回お招きをうけたのは大変うれしかったです。私が学園大にいた時に、自分自身の教育として重視していたのは、ゼミ論集の作成なんですね。ゼミ論文集は全員が執筆して添削をして、自分たちで論文集を作り上げる。装丁もテーマもそして本のタイトルもですね、編集も全部学生たちがするというのを私がここを去るまで、ずっと続けていたんですが、今回来る前にそれをまた目を通してきたんですね。そうするとですね、こういうふうな前書きを書いた編集担当をした学生がいました。まあハードなことは悪いことではない。お気楽なことばかりしていたのでは成長はしない。イージーな物事には人間を発奮させ練磨させる力はない。そういう機会を国際経済学科の中で与えてもらったというふうに書いてありますね。これもホントに嬉しい言葉ですね。厳しくすると、今のところでは先生怖いと言われるんですね。そういうふうに言われたことはなかったですね、ここでは。私は同じように厳しくしてはいたんですけども、それを厳しいことは自分たちにとって成長のひとつの糧になるんだというふうにとってくれた学生たちがいたのが私にとってうれしいことですね。

西田：そういう意味での愛情が厳しくなるんですよ。

木曾：ただそれが怖になってしまうんですよ。で、ここを離れる前の最後の論文集のタイトルは「トライ」ですね。それもやはり途上国のこれからの挑戦と自分たちの挑戦、これからの困難に立ち向かうトライという、そういった気概をもっている、たぶん口にはしないんだけれども、おそらく多くの学生が持っているんだと思うんですね。この国際経済学科にかぎらず、どこの学生も、それをどういうふうにして私達がトライしてみることだとか、困難に突き当たるのを恐れない、踏み出してみるということをどういうふうにして私達がアシストできたとも思いますし、これからの課題だなと思いますね。

西田：いや、なかなか客観的な相对比较です。

若干ほめが強すぎるなと思いますが。

木曾：やはり私も13年おりますと愛情が。

西田：愛情と人間的成長ですか。ところで時間



ですけど、中途参加の学部長の岡本先生あるいは金先生。また、座談会参加のみなさんからご意見とか経験いろいろ。最後に話題にしてほしいといったことがおありでしたら。

岡本：はい、ありがとうございます。大変感銘深く拝聴いたしました。このあと、折角ですから、文章にして起こすんですけどね、それで最後に文章に起こす時に、木曾先生以外の人も教職の経験を持っているのだから、今逆に生徒じゃなくて学生じゃなくて、教員になってね、やっぱり教育とは何か、まあいろいろと思うことは多いと思う。まあそういうことと、それから特に国際教育をするってことのね必要性、困難性とかそういうのを追加的に書いて出していただきたいと思いますね。編集上のことは金先生が、たぶん連絡すると思います、皆さんご協力のほど、お話しいただいたことプラスアルファを金先生の方に。金先生どうぞ。

金：『経済論集』の話が岡本先生からあったように、記念論文集を作成しますので、そして今回は専門を問わずに幅広く掲載する予定ですので、まずは1本ずつの論文を送ってください。それにプラスして岡本先生から依頼があったように今日、話せなかったというようなものがあったりしたら、意見を送ってください。そういうことで、これからは、学科開設30周年記念行事に向けて頑張りたいと思います。よろしくお願いたします。

編集：西田勝喜（経済学部教授）
慶田収（経済学部教授）
金栄緑（経済学部准教授，文責）

